【無料配布】短編ミステリ

～文学フリマ東京41のための書き下ろし～

作：庵字（あんじ）

毒入りアイス事件

――上手く殺す方法が何かないだろうか……。

殺す？　誰を？　決まっている。従兄弟の照幸（てるゆき）をだ。叔父のひとり息子であるあいつが死ねば、叔父の遺産はすべて俺の元に転がり込んでくるのだ……。

日曜の昼間から、まんじりともせずベッドに横になっていることに罪悪感を憶えた俺は、身支度を調えて外へ出ることにした。

何か殺しのヒントを掴めないかと、自然と足は照幸の家へと向いてしまった。カーポートに車がある。ということは、日曜日の昼間にもかかわらず、照幸はひとり自宅で過ごしているわけか。……そんなことを考えていたところに、

「相変わらずシケた面（ツラ）して、どうした？」

声をかけられた。ゆっくりと振り向く。そこに立っていたのは――梓（あずさ）。

「……後ろからで、どうして俺の表情まで分かるっていうんだ？」

「幼なじみの腐れ縁なんだから、それくらい分かるって。ほら、そうじゃん」

梓は不躾にも俺の顔を指さしてきた。今の俺は、確かに眉間に皺を寄せて口元を結んだ〝シケた〟顔をしていたかもしれない。が、それはお前に声をかけられたからだ。因果関係が逆なのだ。

「なに？　お前も照幸に用があんの？」

梓が俺のことを名前で呼んだことは一度もない。

「梓のほうこそ、照幸に用事か？」

「うん。駅まで送ってもらおうと思って」

梓は、玄関の呼び鈴を押すと、家主の応答も待たないままドアを開けて、

「照幸ー、駅まで送ってよ」

敷居をまたぎ、玄関に入り込んだ。信じられない。どういう教育を受けてきたんだ、こいつは、と、いつもながら思う。

「……いないのかな？」と返事がないことに首を傾げる梓。お前と顔を合わせたくなくて居留守を使ってるんじゃないのか、と――心の中で――言ってから、

「いるよ。カーポートに車があっただろ」

「車があることと照幸のいるいないとに、どういう関係があんだよ？」

……駄目だこいつ、と――心の中で――言ってから、

「照幸は体を動かすことが嫌いだから、コンビニに行くにも必ず車を使うだろ。だから、車があるなら、照幸はどこにも外出していないことになる」

「……なるほどね。名探偵じゃん」

この程度のことで名探偵呼ばわりされては、本物の名探偵に申し訳ない。

「照幸、車があるから、いるのは分かってるんだ。大人しく出てこい」

梓が屋内に向かって声を張り上げる。推理を丸パクりされた。すると、ドタドタと階段を下りてくる足音が聞こえ、

「や、やあ、梓ちゃん……」

その照幸が姿を現した。てっきり寝間着のままベッドに寝転がっているとばかり思っていたのだが、意外にもきちんと洋服を着ていた。

「照幸ー、駅まで送って」

挨拶もなく、単刀直入に梓は要望を言いつける。

「も、もちろん、いいよ……」

頭をかきながら照幸は答えた。寝癖らしき髪の跳ねが揺れ動く。

「何時の電車なの？」

訊かれた梓は、ギラギラに飾り立てられたスマホを覗き込んで、

「……んー、二時半かな」

一時間以上も先ではないか。ここから最寄り駅まで車で十五分程度しかかからない。もっと計画性を持って行動してはどうか、と俺は――心の中で――呟いた。

「だったら、まだ時間はあるね。ちょっと上がってお茶でも飲んでいかない？」

「いいよ」

梓は三和土（たたき）に靴を脱ぐと――揃えもしない――照幸に招じられるまま、ずかずかと居間のほうへ廊下を歩いて行った。「俺もいいか」と、嫌そうな顔をした照幸の返事を待たず、俺も廊下に上がった――きちんと靴を揃えて。

居間に脚を投げ出し、スマホをいじりながら、梓が、

「照幸ー、何かない？　おやつとか」
「そういえば、親父からもらったアイスがまだ残ってたな……」
言いながら台所へ向かった照幸を見て――俺もついていった。
叔父――照幸の父親は仕事上、客からよくモノをもらっている。人気があるからではない、ただのご機嫌取りだ。金以外に興味のない叔父だから、そういった贈答品は――まとまった額に換金可能な代物でもなければ――息子の照幸のもとに流れてくることになる。照幸が言ったアイスもその口なのだろう。
「ちょうど三つ残ってた」
冷凍庫から照幸が取りだした三つのカップアイスを見て、俺は内心ほくそ笑んだ。勘が働き、台所についてきたのは正解だった。
「お前は何か飲み物を用意しろよ」
「梓ちゃんって、コーヒー飲むかな？　インスタントしかないけど」
「紅茶がいいんじゃないか？」
なるべく時間を稼ぐべく、俺はそう答えた。
照幸が紅茶を入れてある戸棚に向かうと、俺は、自分の体を遮蔽にしてアイスを隠しつつ作業を開始した。懐から――こんなこともあろうかと普段から常備している――注射器を取り出すと、ひとつのアイスの蓋を取り、蓋の裏にこびりついたアイスをスプーンでそぎ落とし、蓋の裏へ注射器の針先を当て、中身を塗り込んだうえで、蓋を戻す。俺が蓋の裏へ塗り込んだもの、それは〝毒〟だ。成人ひとりの致死量分の。準備完了。これで……照幸は死ぬ。
冷凍庫に残っていた三つのアイスは、チョコミント、ストロベリー、クッキークリーム、の三種類だった。そして、このアイスを口にする俺たち三人のアイスについての嗜好をあげると、こうなる。まず、照幸はクッキークリームを好まない。梓はストロベリーが好きで、チョコミントが嫌い。俺が毒を塗ったのは、チョコミントの蓋の裏だ。これで確実に照幸を殺すことが可能となる。
どういうことか。
まず、この三種類のアイスを提示された場合、梓がチョコミントを選ぶことは決してない。〝何が好きー〟と訊かれて、梓が〝チョコミント〟と答えることは絶対にないのだ。まず梓は好物であるストロベリーを選ぶだろう。残るはチョコミントとクッキークリーム。
照幸が苦手なクッキークリームを取ることも、まずないだろう。梓よりも先に照幸がストロベリーを選ぶこともありえるが、そうなったら梓は黙っていまい。実力行使してでも照幸の手からストロベリーを奪い取るはずだ。梓というのはそういう人間だ。どの道、照幸はチョコミントを手にする運命にあるというわけだ。
が、万が一、何かの間違いが起きて、照幸以外の――俺の――手にチョコミントが渡る可能性はゼロではない。俺がアイスに直接混入するでなく、蓋の裏に毒を塗ったのは、そのリスクを回避するためだ。この状態にある毒は、蓋の裏を舐めなければ経口されることはない。もちろん俺はそんな真似はやらない。が、照幸はやる。必ずやる。今まで何度も見てきた。カップアイスの蓋の裏を必ず舐める。そういう意地汚い男なのだ、あいつは。
三つのアイスと三杯の紅茶が居間に運ばれてきた。案の定、梓はストロベリーを奪い取る。照幸の手は、残された二つのうちの……チョコミントを掴んだ。
――計画どおり。
俺は心中で悪魔のような笑みを浮かべながら、クッキークリームを手に取った。
照幸の父親がもらってきたアイスは、そこらのスーパーでは売っていないような高級品だったのだろう。美味い、美味い、と梓は笑顔でアイスを口に運ぶ。
一方……アイスの蓋にかかろうとする照幸の指を、俺は固唾を呑んで見守る。照幸、お前の命も残り数秒だな……。照幸の指がアイスの蓋を摘まみ、持ち上げて……そして……どういうことだ？　やつは手にしたアイスの蓋を、あろうことか、そのまま屑籠へ放り投げてしまった！　どうした照幸？　お前はそんな男ではなかったはずだ！
「梓ちゃん、あのさ……実は、親父から映画のプレミア試写会のチケットを二枚もらったんだ。よければ……一緒に行かない？」
顔を赤くして、蚊の鳴くような声で話しかける照幸の言葉を、聞いているのかいないのか、梓は黙々と高級アイスを味わい続けるばかりだった。
（了）

お読みいただきありがとうございます。
「本格ミステリ庵」N―05にてお待ちしています！
「新生ミステリ研究会」N―03、04
「新生ミステリ評論会」G―73、もよろしくお願いいたします。

ホームページ